樹木とその葉

海邊八月

若山牧水

青空文庫

昨年の八月いつぱいを伊豆西海岸、古宇（こう）といふ小さな漁村で過しました。これはその思ひ出話。

八月いつぱい、子供を主として何處かの海岸で暮したい、さういふ相談を妻としてから七月の初め私はその場所選定のため伊豆の西海岸へ出懸けました。西海岸と云つてもさう不便な場所では困るので、この沼津から靜浦灣を挾んで、殆んど正面に見えて居る西浦海岸を探す事になつたのです。幸ひそちらには我等の歌の社中の友人も居るので、大よその事をその友人に調べておいて貰ひ、先づ此處等がよからうといふ事を聞いた上、私は出懸けました。そして指定せられた二三箇所を見て　つた末、矢張りその友人の居村である古宇村といふにきめたのでした。

其處は半農半漁の、戸數五十戸ほどの村でした。半農と云つてもそれは殆んど蜜柑の栽培が重でそのほかに椎茸木炭などを作り出すと云つた風の山爲事なのです。その村の少し手前の江の浦重寺三津（しげでらみと）などの漁村には所謂（いはゆる）避暑地としての善惡それ／〃＼の發展が見えてゐましたが、その古宇村にはまだ全然それらの影響がありませんでした。友人に案内せられて行つた宿屋は村内唯一の宿屋で、寧ろ漁師と百姓とを主業としてゐる風に見えました。

旅客用の部屋は母屋（おもや）と鍵形（かぎがた）になつた離室（はなれ）の方で、二階二間、階下二間、すべて六疊づつの部屋なのです。二階は東北、及び僅かに西がかつた方角とが開けてゐて、ツイ眞下に、それこそ

欄干から飛び込めさうな眞下に海がありました。そして海の向うには靜浦牛臥沼津の千本濱がずらりと見渡されて、その千本濱の少し左寄りの上の空に富士が圖抜けて高く聳えて居るのでした。

『これは素敵だ、早速此處にきめませう。』

二階に上るや否やさう言つて、坐りもやらずに、二つの部屋をぐる〳〵と私は　つて歩きました。階下の部屋も欲しかつたのですが、折々　つて來る常客などのために其處だけは空けておきたいとのことで、諦めねばなりませんでした。

『イヤ、二階だけで澤山だ、そちらを子供部屋にして、此處に自分の机を置いて……』

その夜一泊、翌朝早くの船で沼津へ歸る筈でしたが、折よく降り出した雨をかこつけにもう一日滯在することにしました。そして雨に煙つて居る靜かな入江の海を見て何をすることもなく遊んで居りますと、丁度二階の眞下の海に沿うた小徑を三人の女が何やら眞赤な木の實らしいものの入つた籠を重々と背負つて通るのが眼にとまりました。木の實の上は瑞々しい小枝の青葉が置かれ、それに雨が降りかゝつてをりました。

『山桃！』

さう思ふと惶てゝ私は彼等を呼留めました。

そして中の一人から大きな笊（ざる）いつぱいその珍しい果物を買ひとりました。聞けばこの近くの

江梨といふ附近の山にはこの木が澤山あるのださうです。この山桃は東京あたりではなか〳〵喰べられない。そして私は幼い時からこれを飽きるほど喰べて來たので、季節の來るごとに自づと思ひ出されてならぬのでした。早速皿に盛り、滴る様な濃紫の指頭大の粒々しい實の上にさら〳〵と鹽を振つて、サテ徐ろに口に含みました。

斯くして八月の朔日(ついたち)に先づ尋常三年生の長男と書生とが出懸け、二三日して殘り三人の子供と妻と私とがその古宇の宿屋へと行きました。子供達の喜びは言ふまでもありません。宿から二三町離れた所に砂濱があり、割に遠淺になつてゐるので早速彼等の泳ぎ場にきまりました。長男だけ辛うじて五六間の距離を泳げるといふのみで、あとはみなぼちや〳〵黨なのです。妻もまた大きな圖體で、折々このぼちや〳〵組に混つてゐるのです。私だけは宿の直ぐ前の石段から直ぐざんぶと躍り込んで彼等の場所まで泳いで行くのです。何年にも泳いだことがなかつたので最初は少し變でしたが、やがて氣持よく手足を伸して、綺麗な潮を掻き分け得る様になりました。

まつたく潮は綺麗でした。二階から見てゐますと、眞前の岸近く寄つて來て泳いでゐるいろいろの魚の姿がよく見えました。細長い姿のさよりやうぐいはその群までも細長く續いて、折れつ伸びつ、ちよこ〳〵と泳いで行き、黒鯛はおほく獨りぼつちでぼんやりとその大きな體を浮かせ、何か事があるとぴんと打たれたやうにかき沈んで忽ち何處へやら消え去りました。折

々雨の降り出したかの様にぴよん〳〵ぴよん〳〵こまやかな音を立てゝ水面に跳ねあがり、それが朝日か夕日かを受けて居れば、青やかな銀色に輝くのはしこの密群でした。若しこの大群がやゝ遠くを過ぐる時は、海面が急にうす黝く皺ばむのでした。その他、名も知らぬ魚の族がいろいろの色や形で我等の面前に現はれました。中に一つ、土地では海金魚とか言つてゐましたが、樫の葉くらゐの大きさで、それこそ若葉の日に透いた様な眞みどりの魚が始終其處の大きな岩の蔭に泳いでゐました。二三疋から五六疋どまりの群で引汐の時には見えなくなり、上げ汐となればきまつてその岩の蔭にやつて來ました。これは六つに九つの姉妹の一番の仲好しで、兩人競爭してこの眞みどりの着物をつけた友だちの現はれるのを待つてゐるのでした。ほかにまた、これは少々厄介者でしたが海丹がゐました。これも上げ汐につれずつと海岸沿ひに一列になつて押し寄せて來るのです。例の栗の毬の形で、いつ動くとなくむんづ〳〵とやつて來るのです。見てゐれば可憐ですけれど、泳ぎの時に若し誤つて此奴を踏まうなら、彼は忽ちその黒紫の毬を足裏の肉深く刺し通すのです。拔かうとすれば折れて殘り、やがてじく〳〵と痛み出します。僅に脫脂綿に酢を含ませて局部にあて、痛みの去るのを待つほかはないのです。いゝことに、此奴案外に神經質と見え、泳ぎの場所近くやつて來たと見れば宿から物乾竿を持ち出してその一群の中の五つ六つを突きつぶすのです。すると四邊四五間四方位ゐに群れてゐた連中はいつ動くとなくまた何處へともなく逃げ隱れて行くのです。そして少なくとも一兩日の間は其處に姿を見せませんでした。

魚の話のついでに釣の事を申しませう。

私の釣りに行つたのは多く磯魚でした。土地では根魚と呼んでゐます。海底が磯になつてゐる所即ち砂でなくて石や岩の重疊した様な場所にのみ居る魚の總稱です。味は一體に大味ですが、色や形には誠に見ごとなのゝ多いのが特色です。かさご、あかぎ、ごんずい、くしろ、おこぜ、海鰻、その他なほ數種、幾ら聞いても直ぐ忘れてしまふ様な奇怪な名を持つた魚たちが四邊（あたり）の海で釣れました。餌はしこ、またその一族のはま何とかいふさよりに似た細身の魚を最上とし、それが間に合はずば大方の魚の切肉（きりみ）、即ち共餌（ともえ）ででも釣れるのです。岡からも釣れますが、どうしても船です。一體に此處の入江は入江としては非常に深く、ことに岸から直ぐずつと深く切れ込んでゐる深みが多いのです。その深み——所によれば二三十尋に及びました——に舷から絲を垂れて釣るのです。

技巧は簡單で、舷に掌を置き、そして親指と人差指との間に持つて垂れた釣絲の感觸によつて魚の寄りを知り、やがて程を見て手速く船の中に巻き上ぐるのです。唯だ絲の降りてゐる海底が岩石原であるため、馴れないうちはよく鉤（はり）をそれに引つ懸けました。宿の主人が名人とやらで、それに教はつて釣り始めたのですが、三度四度と行くうちにいつか主人より私の方が餘計釣る様になりました。親爺（おやぢ）負惜しんで曰く、

『おめえたちは指がびるつこいせえに追つつかねエ。』

びるつこいとは柔かな、せえには故にの意。蓋し指の柔かなためいち速く絲の感觸を受くるから釣りいゝのだとの事でせう。

何しろ二三十尋もある深みの底から一尺大のかさごなどがその大きな口をあいて、一條の絲につれて重々とあがつて來る時の指から腕、腕から頭にかけての感覺の面白さはまつたく別でした。海鰻は淺い所でも釣れました。だからその海底に魚の姿を見ながらに釣れるのです。大瀬崎といふ岬の蔭の磯に此奴の無數に棲んでゐる所がありました。此處では先づ用意して行つた魚の腸（臭い程いゝの故、腐つてゐればなほよし）を海中に投じ、徐ろに其處等の岩や石の間を窺いてゐるのです。すると間もなく赤黄色の斑のある海鰻先生がどの石の蔭からともなくのろつと現はれます。出たぞ、と絲をおろすころには、出るは〳〵、のろり〳〵と大きな七五三縄の縄片のやうな奴が縒れつ縺れつ岩から岩の蔭を傳うて泳ぎ　ります。それの鼻先へ（この先生、眼がろくに見えず唯だ匂だけで動くのださうです、だから餘計に間が抜けて見えます）餌を突きつけて釣るのですからわけはありません。但し此奴釣りあげてから厄介で、私などの細指をば唯だの一噛みで噛み切らうといふ鋭い齒を持つてゐるので、鉤をはづすが大難澁、私など大抵一匹ごとに鉤を切つて新たなのを用ゐました。大きいのになると幅二三寸長さ二三尺のものがゐました。形美ならず、味また不美。

思ひ出して來るといろ〳〵ありますが、もう一つ、毎日の夕方の事を書いてこれを終りませ

う。ア、朝起きてから顔も洗はずに、まだ日のさゝぬうす黒い海面へ庭さきからざぶりと飛び込む愉快さをも書き落してゐましたね。

この村から毎日早朝沼津へ向けて出る發動機船があります。そしてそれは午後の四時、五時の頃に村へ歸つて來るのです。私はいち速くこの船の人たちと懇意になつて、いろ〳〵と便宜を得ました。そんな佗しい漁村の、そんな佗しい宿屋のことで、何も御馳走がありません。殆んど自炊をしてゐる形で私たちは其處の一月を送つたのですが、その食料品をば全てこの發動機船に頼んで沼津から取り寄せたのです。そればかりでなく、沼津の留守宅から　送して來る郵便や新聞等も途中一二箇所の郵便局の手を經るよりもこの船に頼んで持つて來て貰ふ方がずつと速かつたのです。

夕方の四時近く、いつとなく夕涼が動き出して西日を受けた入江の海の小波が白々と輝き出した頃、泳ぎに疲れた二階の一家族は誰かれとなく一樣に沖の方に眼を注ぎます。

『來た、來た、壯快丸が見えますよ、父さん！』

兄が斯う叫びます。

『どれ、どれ、……うゝん、あれは常盤丸だよ、壯快丸ではないよ。』

『嘘言つてらア、御らんよ、ぺんきが白ぢやアないか。』

『ア、さうだ、今日も兄さんに先に見附けられた、つまんないなア。』

と妹が呟きます。

大抵親子二三人してその壯快丸の着く所へ出懸けます。そして野菜や（海岸には大抵何處でもこれが少ない）肉や郵便物を受取つてめい〳〵に持つて歸ります。歸つてから兄は水汲み、妻は七輪、父親はまた手網を持つて岸近く浮けてある生簀（いけす）に釣り溜めておいた魚をすくひに泳ぎ出すのです。

八月が終りかけると母と子供とは學校があるので家の方に歸り去り、父親一人は釣に未練を殘してもう二三日とその宿に殘りましたが、越えて九月一日の正午、例の大地震を食つて大いにうろたへたのでした。

青空文庫情報

底本：「若山牧水全集　第七巻」雄鶏社
　　1958（昭和33）年11月30日発行
入力：柴　武志
校正：浅原庸子
2001年6月14日公開
2005年11月17日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

樹木とその葉

海邊八月

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　若山牧水
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/